

“

第5回講座 令和2年12月22日(火) 午後3時～午後4時30分

小学校英語指導の心得と中学校への接続の期待

明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター

准教授 金子 義隆

明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター

教授 石鍋 浩

明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター

教授 百瀬 美帆

明海大学 多言語コミュニケーションセンター

教授 Patrizia Hayashi

明海大学 多言語コミュニケーションセンター

准教授 Tyson Rode

明海大学 外国語学部 英米語学科

講師 前田 隆子

J-SHINE 専務理事(上智大学 言語教育研究センター 教授)

藤田 保

J-SHINE 理事(玉川大学大学院 名誉教授・特任教授)

佐藤 久美子

J-SHINE 事務局長

鈴木 菜津美

”

【講座内容の書き起こし】

高野先生：

皆さん、こんにちは。明海大学副学長、外国語学部長、そして本事業の責任者の高野と申します。本日は12月15日の第4回講座に引き続き、MEIKAI-JOE第5回講座、最終回となります。

本日のテーマは、「小学校英語指導の心得と中学校への接続の期待」です。本講座のまとめとして、本学の教職課程センター、地域学校教育センターの金子義隆准教授から「小学校英語指導者が知っておくべき第二習得言語と動機付けの基礎理論」について学びます。その次に、第3回講座でも登場した本学、同センターの石鍋浩教授から「中学校英語につなぐために、小学校段階で指導すべきことの理解」を講義とビデオを通して学んでいきます。

冒頭で申し上げたように、本講座をもって明海大学から発信する講座が全て終了します。そのため今回は、特別にこれまでの講師の皆様方にも登場していただきます。最初は、協力機関であるJ-SHINEから、藤田保(上智大学・言語研究センター教授)、佐藤久美子(玉川大学大学院名誉教授・特任教授)、鈴木菜津美(J-SHINE事務局長)から、受講者の皆様に対してメッセージをお送りいたします。その後、本学の講座担当者からこれまでの講座に対する質問を踏まえた回答を行うとともに、受講者に対して改めてメッセージを伝えたいと思います。

次に、講師の紹介をします。これまで登場いただいた講師の方々はすでに紹介済みですので、今回初めて登場する本学の金子義隆准教授についてご紹介します。

金子先生は、1995年に上智大学外国語学部英語学科を卒業後、アメリカのモントレイ国際大学院大学で英語教授法(TESOL)の修士号を取られました。日本に帰国後、栃木県の県立高校2校で英語科の教員をされ、そのほかにも、

育英短期大学、淑徳大学、共愛学園前橋国際大学の専任講師や准教授を経て、国立宇都宮大学・基盤教育センターで准教授となりました。2014年には本学の英米学科の准教授、2017年に教職課程センター、地域教育学校センターの准教授となり、現在に至ります。先生は、宇都宮大学に勤務していた時に、優秀な教員に贈られる「ベストレクチャー賞」を受賞しています。大学勤務の傍ら、これまで各種スピーチコンテストの審査員や審査員長を務めるほか、栃木、英語教育推進中核教員研修や小学校や中学校の教員研修の講師を多数務めてまいりました。また、本学と連携協定を結んでいる東京都足立区の事業で、足立区の小学生のために実施する明海大学あけみ英語村の事業、中学生と本学の留学生との交流事業でも中心となって担当しています。専門分野は、英語教育学であり、特に第二言語習得、動機付けを高める英語教育に関する研究です。それでは、金子先生よろしくお願ひします。

=====
金子先生：

最初は、「知っておこう！ 小学校英語指導の心得」です。私の話は、3つに分かれています。「1. 音声インプットが習得のはじまり」「2. 英語が楽しいという気持ちを持続させるためには」「3. 英語嫌いにさせないためには」、以上の3点についてお話しします。最初に、第二言語習得研究からわかってきたことを、小学校英語指導に活かしていただくために、いくつかポイントを紹介いたします。

言葉を学ぶ時の最初のステップは、目標言語のインプットを受けることです。これからの私の話では、目標言語は、英語のことだと考えてください。インプットとは、耳から聞こえる英語のことであり、目から見える文字で書かれた英語もそうです。インプットを受けることが習得の第一歩となります。特に音声インプットを受けることが大切です。英語学習の初期段階では、英語の文字は読めないで、英語の音声インプットを受けることが最初はとても重要になります。「言語習得」という観点からも、「音声言語の習得」から始めることは、とても自然なことです。皆さん、世界にはいくつの言語があるかご存知でしょうか。言語や方言の定義が定まっていないため、研究者によっても数え方は様々ですが、8千語以上あると言われていています。その8千語の中に、文字を持たない言語はたくさんあります。しかし、音声のない言語は1つもありません。文字がなくても言語は存在できますが、音声があれば言語は存在できないのです。つまり、言語とは音声ありきであり、文字はあくまでも二次的な存在であるのです。そのため、言語を習得するときも、音声から始めることはごく自然なことなのです。英語の指導も、音声インプットを与える指導から始めていきます。Teacher TalkやSmall Talk、歌、チャンツ、絵本の読み聞かせなどがそうです。しかし、英語の音声インプットを与えるだけでいいというわけではありません。聞いたインプットを子供たちが理解できていなければ習得につながりません。つまり、インプットの意味づけが必要です。英語のインプットの意味を理解するためには、どうすればいいでしょうか。英単語を紹介したいときなど、様々な道具を利用したらいいでしょう。例えば、絵や写真、実物の活用です。本当は実物を見せるのが一番です。しかし、それができない場合は、例えばmountainという単語を紹介する時に、山の絵や写真を見せながら、mountainと紹介すれば十分です。第3回講座でも紹介したデジタル教科書を活用するといいいでしょう。デジタル教科書には、絵や写真と共に音声インプットがあります。また、歌、チャンツなどがたくさん含まれています。動画を見せると英語のインプットの理解が深まるでしょう。新しいインプットを紹介するたびに日本語に訳す必要はありません。英語と日本語の意味が結び付くような工夫をすることが重要です。また、大切なことはコミュニケーション活動を行う際の場面設定です。場面設定がしっかりされている場合、英語のインプットの意味を子供たちは自分で推測することができます。

第3回講座でも紹介されたビデオを思い出していただきたいと思います。宮崎県の小学校6年生の岩切先生のクラスでは、場面設定をする際に、「それでは今から冬休みに何をしたかを話し合ひましょう」とは日本語で言いませんでした。その代わりに、岩切先生は、It's cold. It's winter. Oh, winter vacation! Jake-sensei, please tell me about your winter vacation. と言って、隣にいたALTのジェイク先生とお互いの冬休みのことについて語り合ひ始めました。それを見ていた子供たちは、先生たちが何の話をしているか理解できていたと思います。その証拠に、その後に岩切

先生が、Do you remember your winter vacation? Let's go! と言ったときに、子供たちがペアでお互いの冬休みについて語り合い始めました。このように場面設定がしっかりできていれば余計な説明がなくても、インプットの意味を理解することができるのです。

これからは、第1回講座で触れられた、宣言的知識と手続き的知識の話をしたと思います。宣言的知識とは、言葉で説明できる知識です。例えば、英語の過去形には動詞の現在形の末尾にedをつけると言葉で説明できる知識です。しかし、この知識があっても必ずしも実際のコミュニケーションで過去形が使いこなせるとは限りません。つまり、実際に使いこなすことと、言葉で説明できることは別の知識だということです。実際に使いこなす知識を手続き的知識と言います。例えば皆さんは日本語を母語としています。日本語の格助詞「は」や「が」をご存知だと思います。では、どんな時に「は」や「が」を使い分けるのか、説明できるでしょうか。私はできません。できませんが、「は」と「が」を正しく使い分けることはできます。つまり、手続き的知識があれば、コミュニケーション上問題がないというわけです。英語学習においてもそうです。宣言的知識もちろん役に立ちますが、英語教育では英語の手続き的知識の習得を目指します。では、どうやって手続き的知識を育てたらいいでしょうか。インプットを聞いて、意味を理解しただけでは宣言的知識だけで終わってしまいます。インプットの意味を理解できたらそれを使いこなせるようにする必要があります。すぐに使いこなすことはできません。インプットに慣れる活動が必要になります。慣れる活動をたくさんした後、その新しいインプットを使ってコミュニケーション活動をしましょう。新しいインプットに出会い、インプットに慣れながらアプトプットをしていくスパイラル的授業展開をお勧めします。先ほどの岩切先生の授業を思い出してください。

岩切先生は、ジェイク先生と冬休みにしたことについてSmall Talkをしました。これが新しい語彙と表現に出会う活動です。

ここで

I went to Udo Shrine. I enjoyed throwing lucky stones. I ate shabu-shabu. It was delicious. How about you? などを導入しました。子供たちは自然な場面設定の中で、新しいインプットを受けました。実はこの先生たちが行ったSmall Talkを子供たちができるようになることが単元の最終目標になります。

今度は、新しいインプットに対して慣れる活動が必要です。ビデオではこの後すぐにペア活動に入りましたが、通常はそうはいきません。なぜ、ビデオではそのようなことができたかという、おそらくこの活動は初めてではなかったのだと思います。『We Can!2』にはUnit5「Summer Vacation」の単元があります。夏休みが終わった段階でこの単元を学習していたと思います。そして今回は冬休みが終わった時期だったので、Unit 5で学んだことを復習するちょうどいいタイミングだったのかもしれませんが、では、初めてこの単元を扱うにはどうしたらいいでしょうか？先ほど述べた言語材料を全てひと通り覚えさせようとするのではなく、段階的に習得させていくことがよいでしょう。

例えばYou went to ～の～（どこどこ）に当たる部分を、You went to the mountain. You went to the sea. You went to the zoo.などと子供たちとやり取りをしながら、実際に行った場所を導入していけばいいと思います。そして慣れさせるということです。その後、子供たちだけでI went to ～（どこどこ）How about you? という活動をして言えるようにさせたいと思います。最初の1時間はそれでいいでしょう。次の時間にI went to ～（どこどこ）をペアでやり取りしながら復習し、それに加えてIt was fun.などと感想を言えるといいと思います。そして、3時間目に、I enjoy ～.まで言えるようにしたいと思います。2時間目以降は、前時に習ったことを復習しながら、それをもとに発展させていくスパイラル的指導がポイントです。最終的に I went to the sea. I enjoy swimming. I ate shaved ice. It was delicious. How about you? までを言えるようにすることを目標とします。

それでは、ここからは子供たちの英語学習の動機付けについて考えていきたいと思います。文部科学省が行った「平成26年度 英語教育改善のための英語力調査」の結果では、英語が好きと答えたのは、小学生の5、6年生の70.9%と比較的高い数字でした。英語教育の初期段階では高い動機付けを持っていることがわかります。ところが、中学校1年生になると61.6%、中学2年生だと50.3%と、毎年約10%ずつ低下していきます。これは大きな問題です。英

語学習を開始する小学生時の高い動機付けを保つことが大切です。大人の学習者は希望の学校に進学したいからとか、希望の職業に就くためと、何かを得るために手段として英語を学習する道具的動機付けがある程度有効です。しかし、小学生にはそのような動機付けはあまり効果的ではないと思います。小学生には遠い将来に関する動機付けより、むしろ今、勉強している英語が楽しいとか、英語が分かるとうれしとか、Here and now.の動機付けが効果的です。具体的には3つの段階ごとの動機付けが大切です。

まず、行動前(授業前)段階です。「英語はやれば誰にだってできる」信念をもたせることです。人間誰しも、やってもできないと思っていたら、前向きに取り組むことが難しいです。やればできると信じればやる気になるものです。教師の重要な役割は、「子供たちに英語はやればできるんだ」という正しい信念をもたせることです。

次に、「英語は間違えながら上手になる」信念をもたせることです。英語を話したり、書いたりしたりする活動を始めたら子供たちは、必ず間違いをします。間違いは必ずしも悪ではありません。むしろ間違いは言語習得の過程でつきものです。間違いを通して学びを深めていくチャンスです。間違えたらそこから学べばいいのです。Nothing to lose.失うものはない、という精神でいきたいと思います。間違いを恐れずにどんどん英語を使っていこうというメッセージを、教師が常に発信して間違いを受容できるクラスに育てていくことがとても大切です。間違っても恥ずかしくない、ばかにされないクラスの雰囲気を作りましょう。

次に、行動(授業中)の段階です。授業中には子供たちに成功体験を与えることです。子供たちに「できた」「わかった」という場面をたくさん作りたと思います。その結果、子供たち一人一人の自己肯定感を高めることにつながって、それが英語学習へのやる気につながっていきます。そして、もうすでに多くの先生方は実践されていると思いますが、子供たちをたくさん褒めましょう。叱るよりも褒める方が子供たちはやる気になります。自尊心、自己肯定感は褒めることで強くなります。英語の褒めことばをたくさん覚えておいてほしいと思います。Good job.だけではなく、Great! Wonderful! Excellent! Fantastic! Amazing!などをたくさん覚えていただいて、褒めるレパートリーをたくさんためておいてほしいと思います。また、具体的に褒めてほしいと思います。

I like your gesture. Your voice is very clear. Your handwriting is very beautiful.

などです。第2回講座でも学習しました。MEIKAI-JOEのWebサイトでも、資料を見ることができます。忘れてしまった方は確認してください。文部科学省の『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』の「クラスルーム・イングリッシュ」の中にもありますし、ネットでも英語の褒め方を検索すると、たくさん出てきます。ぜひご活用ください。

そして、授業の終わりに振り返りをして、できなかったことではなくできるようになったことを、また、学んだことに目を向けさせられるといいと思います。振り返りシートなどを使って、子供たちが自分の学びを振り返る時間を大切にしたいと思います。振り返りは、子供たちが自律的な学習者になるために、重要です。また、子供たちの振り返りシートは、教師が自らの授業を振り返り、授業改善を行うためのヒントを与えてくれるという点においても重要です。振り返りシートでは他人との比較ではなく、自分の中でどれくらい成長できたかを大切にするとよいと思います。そして、先ほども言いましたが、子供たちの取り組みに対してもう一度褒めてあげたいと思います。このように授業前～授業中～授業後の3段階での動機付けができると望ましいでしょう。

最後に英語嫌いにさせないためのポイントを見ていきましょう。

まず、文法を教えないこと。つまり、文法の用語を使った宣言的知識の説明はしないということです。小学校の学習指導要領の指導内容には文法はありません。文法が出てくるのは中学校からです。ただ、語順には意識を向けさせたいと思います。語順は英語において非常に大切です。語順が違えば意味が変わってしまいます。そのことに気付かせられるといいですね。

Ken can eat meat.とMeat can eat Ken.では、全く意味が変わってきます。英語は語順が大切なのだと気付かせたいと思います。

次に、正確さを追求しすぎないということです。正確さに重きを置きすぎるのは危険です。特に話す活動中はいつもコミュ

ニケーションが中心です。ですから、意味が通じることを重んじてコミュニケーション活動をしたいと思います。そうでなければ、子供たちは安心して間違えることができません。そして、もし子供が、I eat chicken last night. と言っても十分、意味は通じます。Oh! You ate chicken. That's nice !と返してあげられるのはいいと思います。これを「リキャスト」と言います。リキャストのいい点は、コミュニケーションの流れを崩さずに正しい英語をインプットできることです。最後に文字指導についてお話しします。

私が、足立区教育委員会と連携させていただき、中学生約2,500人に対して3年前に実施した英語学習意識調査では、英語が嫌いな理由の第1位が「文法が難しいから」でした。第2位が「テストでいい点が取れないから」。第3位が「英語の単語を読んだり書いたりできないから」でした。多くの中学生は、英単語を発音したり書いたりすることに困難を覚えているのです。これは英語がつづりと発音の一致度の低い言語だからだと言えます。日本語はひらがなやカタカナを見ればわかるように、一部の例外をのぞき、つづりと発音が一致しています。「あ」と書いてあれば必ず「あ」と読みます。日本語のつづりの発音の一致に慣れている子供たちにとって、つづりと発音の一致度が低い英語を学ぶことは大きな負担であると知ってもらいたいと思います。実際、英語のネイティブでもつづりと発音の不一致には困難を覚えます。しかし、最終的につづりと発音の不一致を克服することができるのは、日常的に多くのインプットを音で聞いているからです。つまり、豊富な音声情報が頭に入っているので、つづりを覚えることが比較的容易なのです。中学校でつづりと発音の関係を学ぶために、小学校でしておいてほしいのは、できるだけ多くの音声インプットを入れていただき、できるだけ子供たちに自分の口で言えるようにしておいてもらうことです。そうすれば、中学校に入学した後、つづりと発音の関係を学ぶ時にとっても楽になると思います。そして小学校では、アルファベットには名称だけでなく、音があることを指導してもらいたいと思います。アルファベットの名称を読めるだけでは英語を読めるようにはなりません。例えば、アルファベットには「D(ディー)」という名前のほかに、「ドゥ」という音があります。「G」には「グッ」という音があります。十分に音声で、例えばdogという単語を学んだ後に、犬の絵の下にdogと書いてあって、D-O-Gと読むのではなく、「ドッグ」と発音することに、違和感を感じないですむと思います。ここで、『We Can!』の「アルファベット jingle」を紹介します。

(紹介音声 流れる)

石鍋先生：

「中学校への接続の期待」についてお話しさせていただきます。

事前のアンケートで、先生方から中学校への接続に関する質問をいくつか受けました。その中から次の3点を考えていきましょう。

1. 中学校へつなぐために小学校でどこまで指導すべきか
2. 中学校での授業のようす(動画視聴)
3. 小中連携の重要性

第1回の藤田先生、第4回の佐藤先生の講座でも触れられていましたが、小学校学習指導要領の外国語活動、外国語の目標、そして、中学校の外国語の目標です。私なりに色をつけてみました。同じ色のところを見ていくと、発達段階に合わせて目標がどのようになっていくかがわかります。これから示す学習指導要領については、ざっくりとした説明にとどめます。詳しくは後日配信される本講座のアーカイブ、学習指導要領そのものでご確認ください。

今回の学習指導要領では育成すべき資質能力の3つの柱、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力、人間性等のそれぞれに関する目標を明確にしています。

これは、知識及び技能に関するものです。(スライド参照)

これは、思考力、判断力、表現力等に関する目標です。(スライド参照)

そしてこれは、学びに向かう力、人間性等に関する目標です。(スライド参照)

次に学習指導要領 英語 目標の部分を見てみましょう。このスライドと次のスライドで、「聞くこと」と「話すこと」[やり取

り]」を例に挙げ、私なりに色づけをしたり下線を引いたりしてみました。中学年、語尾のところをみてください。「聞き取るようにする」段階ですが、高学年、中学校では「聞き取ることができるようにする」段階まで求めていることがわかります。

「話すこと[やり取り]」では、小学校中学年、高学年では、「自分や相手のこと及び身の回りのものに関する事柄について」を扱っていますが、中学校では「社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて」を扱うことになっています。

さて、私も小学校に訪問する機会がありますが、先生方からよく質問されるのは、「文字はどこまで指導すればいいですか?」「文字の指導がよくわかりません」などということです。ご承知の通り、「読むこと」「書くこと」は高学年で指導します。では、文字をいつからどの程度まで指導すべきなのでしょう。そして、どう中学校につないでいくべきなのでしょう。

これは、中学年の言語活動に関する事項「聞くこと」の抜粋です。「文字の読み方が発音されるのを聞いて、活字体で書かれた文字と結びつける活動」と書かれています。聞く活動ではありますが、中学年で文字が出てきます。ここでの文字は、英語の活字体の大文字と小文字を指しています。文字の読み方、A Bなどを聞いて活字体の文字と結びつけることを表しています。具体的に活字体で表された文字を指で刺したり、発音した順に並び替えたり、線をつなぎ合わせたりして文字を一致させる活動があります。指で文字の形を作ったり、友達と一緒に、字の形を体で表現したり、文字の形に着目して小文字を1階建ての文字(a c e)、2階建て(b d f)、地下室(g j y)など、文字を仲間分けするなどのアイデアがあります。あくまでも活動を通して、体験的に文字に親しませることが重要です。

高学年の「読むこと」での文字の扱いについては、「活字体で書かれた文字を見て、その読み方を適切に発音する活動」と書かれています。高学年では、中学年で慣れ親しんだ文字の名称を適切に発音できるようにします。ei/biと発音させる段階にあります。高学年の先生方が、中学年で学習内容を把握することによって、スムーズに中学年と高学年の接続を図っていただきたいと思っています。

学習指導要領の言語活動の「書くこと」に関する事項では、

(スライド)

【高学年】

ア) 文字の読み方が発音されるのを聞いて、活字体の大文字、小文字を書く活動。

イ) 相手に伝えるなどの目的をもって、身近で簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句を書き写す活動。

ウ) 相手に伝えるなどの目的をもって、語と語の区切りに注意して、身近で簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ基本的な表現を書き写す活動。

エ) 相手に伝えるなどの目的をもって、名前や年齢、趣味、好き嫌いなど、自分に関する簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いた例の中から言葉を選んで書く活動。

赤字の部分をご覧ください。「書く活動」と「書き写す活動」があります。ウとエでは「書き写す活動」の「例の中から言葉を選んで書く活動」というのがあります。たまたま、小学校で綴りを完全に定着させようとして単語テストをやっているケースがあると聞きます。小学校ではそこまで求めていないことがこの目標からわかります。

もう一度、ウを見ると、冒頭に「相手に伝えるなどの目的をもって」とあります。これは、「書き写す」という言葉から意味を考えさせたり、目的をもたせたりすることなく、機械的に書かせたりするだけの活動・指導にならないためにこの言葉が入っています。ぜひ、先生方、この点には十分に留意してほしいと思います。

小学校での各活動の中味について、実は中学校の先生も理解していない場合もあります。小中連携の場などを通して、ぜひ、中学校の先生にもこのことをお伝えください。

続きまして、中学校での授業の様子を見てみましょう。文部科学省の動画を用意しました。これは、コミュニケーションを通して、言語材料、ここでは過去形について教える授業です。中学校の新しい学習指導要領では、生徒が英語に触れる機会を充実すると共に、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業を英語で行うことを基本とする、とされています。新しく学ぶ言語材料の導入にもひと工夫が必要になってきます。本動画では、言語活動で使わせたい表現、過去形を教える方法の例を紹介しています。本講座の第3回 Small Talkを思い出していただきながらご覧ください。

(中学校での授業の様子 動画上映)

今、視聴していただいた動画は、この画面の①の過程、過去形とはこういうものだよという解説したり、表現を示してこれらを使いましょうなどという明示的な指導をしたりはしていません。新しく学ぶ言語材料、表現を使って、生徒と自然なやり取りを通してそれらの音、意味、使い方を教えています。先生方の中には中学時代に、まずは文法、文型を学んで新しい単語を学習し、その後本文を学習する。そして、本文を全て日本語に直すという学習を経験された方がいらっしゃるかもしれません。しかし、これからは動画で見ていただいたように、小学校からの学習の積み重ねが、中学校でも生かされるようになっていきます。

それでは次に、小中連携の重要性について文部科学省の「英語教育実施状況調査」の中から平成30年度のものを見ていきましょう。上にあるボックスの中を読みます。

以下のように授業改善に関する項目等の数値が高い都道府県・指定都市ほど、生徒の英語力に関する指標を満たしている割合が高い。

その下、中段に、中学生という部分があります。

(CEFR A1レベル(英検3級)相当以上)という部分の下に、小中連携カリキュラム作成と書かれています。ここで書かれているというのは、「小中連携の相関が見られますよという表れです。文科省の調査には、考察が書かれています。左のボックスの中に、小中連携の推進などの取り組みを行っている学校が多い都道府県は、中学生・高校生の英語力指標の到達度が高い傾向にある。」とはっきり考察しています。

私の話の最後となります。小中連携について、先生方をお願いをして、まとめとします。

「令和元年度 英語教育実施状況調査」の一部です。左側の円グラフ、小中連携に取り組んでいる中学校は全体の82%にのぼります。右の棒グラフでは、小中連携の形態として情報交換、授業参観、年間指導計画の交換などを行っている小中学校は74%近く実施されていることがわかります。真ん中の交流については、指導方法についての検討会、授業参観後に研究協議会等に至ると、56%ということになります。右の、小中連携したカリキュラムの作成になると実施率が18%弱となってしまいます。今後、児童たちが、中学生になり、英語力をさらに向上させていくためにも、小中連携の形態について、小中学校の先生に協議を深めていただきたいと思います。その際、講座前タスクで示した文部科学省の小中高が連携した活動事例をぜひ参考にしてみてください。小学校での学習の積み重ねが中学校において、いかに充実をして子供たちの英語力の向上につながっていくことを心から期待しています。

=====

高野先生：

ここまでが第5回の講座のメインの部分になります。ここから先は、画面に映っている講座担当者のメッセージに入ります。第1回の講座を担当した、藤田保先生からビデオメッセージが寄せられています。

藤田先生(動画メッセージ)：

皆さん、こんにちは。第1回講座を担当した藤田です。本日は、ちょうど同じ時間帯に東京都教育庁の会議に出席しますので、ビデオ参加とさせていただきます。

私の講座の後に、多くの先生方からコメント、質問をいただきました。私の講座では、学習指導要領というものについての理解の仕方、その背景について、どういうところを目指しているのか、を中心にお話しさせていただきました。そ

の基本の理念の理解が、第2回目から4回目の先生方の具体的なお話の理解の礎になればいいと思い、お話ししました。この講座を通して、私自身が先生方に伝えたいメッセージはひと言で言うと、先生方に自信をもっていただきたい、自信をもって英語、外国語の授業に取り組んでいただきたい、ということです。それはどう言うことかと言いますと、例えば街頭インタビューでいろいろな人に「あなたは英語ができますか?」と聞くと、多くの人たちは「いやいやいや、英語は無理です、わかりません」と言う人が大多数ではないかと思えます。「はい。英語できます」と胸を張って言える人は滅多にいないと思えます。では、本当にそう言う人たちは英語がわからないのでしょうか、知らないのでしょうか。「私は、英語がわかりません」という文と、「私はクメール語がわかりません」という文を比べてみてください。文の構造は一緒です。でも、意味していることは、ひょっとするとかなり違うかもしれません。

例えば、「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」とか、数字で「1、2、3、4、5」などを英語で言えません、という人が、日本人の大人の中にどれだけいるのか。ほぼ0といってもいいでしょう。Hello. Goodbye. Thank you. を知らない人は多分いないと思えます。でもクメール語ではどうですか? ちなみに、クメール語はカンボジアで話されている言葉ですが(クメール語で同様に発言)、日本の大人の何人が知っているでしょう。そのように考えてみると、「私は、英語がわかりません」という文と、「私はクメール語がわかりません」という2つの文を比べると、クメール語に関しては本当に知らない、知識がないということかもしれませんが、英語に関しては、皆さんは知っている。否定文の作り方もほぼみんな知っています。文法、単語も含めて知っているにもかかわらず、「わかりません、できません」と言うのは「自信がない」ということです。日本の大人たち、実は、最低でも中・高で英語を学んでいる人が大半です。みんな知識がある。でも自信がない。だからこそ、先生方には自信をもって授業をしていただきたいのです。子供たちには、その自信をつけてあげてほしいということにつながっていくのです。普段の授業で、いろんな科目を先生方も教えていますよね。国語、算数、社会。それらの授業では、当然、日本語でお話しているでしょう。それと全く同じように、英語の授業になったら英語で授業をしていい。そんな姿を見せてあげる。そうすることにより、子供たちは必要に応じて、使う時になったら英語は使うんだと、自分は子供だから日本語しかできないけど、必要になったら大人になって英語が話せるようになるんだ。そういうイメージがもてるようになっていく。実は、それが一番大事なのではないかと思っています。

そう言われても、先生の中には、「自信がない」と言われる方もいらっしゃるかもしれません。僕は、先生方に何も、英語の見本になれとは思っていないんです。それはデジタル教材、CD、DVD、あるいはALTの先生、いくらでも必要な英語の見本のリソースはあります。担任の先生方に何をしてほしいのか、どうしてほしいのかと言うと、英語の見本ではなくて、英語を使う人の見本になってほしいのです。ALTと実際、例えば前に出て会話の見本を見せる、ちょっとした声かけをする、子供たちに語りかけをする。そういう中では、第2回目、3回目の講座で出てきたようなチーム・ティーチングの中での声かけやSmall Talkや、指示出しなど、そのようなものは授業の前に、ある程度用意しておけばどのようにでもなるような類です。自由自在に好きなことを言いなさい、と言うことではないですから。先生が臆せず使っている姿を子供たちに見せる。国語の授業では日本語で話す先生が、英語の時間には英語で話すんだ。それに、子供たちが疑問をもたなくなるということが大事。知っているにも関わらず、「私は英語ができません」という、多くの大人たちがもっている自信のなさを払拭していく。実際の英語力は、中学、高校へ行って身に付けられればいいですよ。でも、心持ち。気持ちの部分。初めから「無理、無理」と言う姿を見せるのか、知識は足りないかもしれないけど、英語を使うなんて当たり前のことだよ、不思議でも特別でも何でもないことだよ、と取り組むのか。この2つには大きな違いがあります。まずは、そのような力を身に付けてもらうということが小学校段階では大事。確かに、聞く、読む、話す、書くとか技術的なことも必要になることもあるかもしれませんが、学びに向かう力がないと、どれだけ知識を詰め込んでも使えずに腐らせてしまう。そうならないための一番基本的な部分だと思います。

今回寄せられた質問のなかには、「帰国生みたいな英語のできる子がいる場合、どうしたらいいのか?」という質問がありました。彼らが発することというのは、どんなレベルでも構わないわけですよ。必要に応じて、グループ活動のリーダーになってもらうなどをすればいいだけの話。別に先生が、全てを知っている必要はない。先生方は、その他の普

通の生徒たち、これから英語を学ぼうとする児童たちに対して、必要なことを教えていけばいい。他の教科でも同じです。算数を教えていても、「もうそこは塾で習ったよ」なんて子がいるかもしれない。社会や理科でも、「その知識はもう知っているよ」なんている子がいるわけです。だからと言って、そこで先生が、ひるむ必要はありません。必要なことを必要な人に教えるだけです。そこで自信を失う必要はありません。ALTとチーム・ティーチングをするのなら話すのを見せながら、そこで英語を使うということ。自分一人で授業をするにあたって、Classroom Englishを活用しながら、堂々と指示を出していけばいい。そういう形で授業をしていくことで、子供たちも大人になったら先生みたいに英語を使うようになるんだねというイメージをもってもらえばいいと思います。そういうロールモデルになっていただければいいと思います。先生方には、自信をもって授業に取り組んでいただければいいなと思います。頑張ってください！

高野先生：

引き続き、前回の講座を担当していただきました玉川大学大学院名誉教授の佐藤久美子先生から、リアルタイムでZoomに入ってください。

佐藤先生：

皆さん、こんにちは。自宅から参加させていただきます。前回たくさんの質問をいただき、ありがとうございました。質問に関する答えは、ネットにあげますのでご参照ください。

今回は、先生方がもっとアイデアを知りたいというご意見がありましたので、事後タスクについて解説してメッセージとさせていただきます。第4回講座では、「小学校英語の授業づくりと評価について」のお話をしました。講座後のタスクでは、このように皆さんにお伝えしました。

Do you have ~? Yes, I do. / No, I don't.

この目標表現を教えようと思う時、どんな必然的な場面を考えることができますか？

どんな時にこの英語を使ってみたいですか？ 子供たちはどんな時に Do you have ~? と、お互いに聞いてみたいでしょうか？ こういうことを考えてくださいということなんです。

常に、小学校の先生方は一番子供たちのことを理解しているわけです。子供たちだったらどんな時に使いたいと思うのかを考えて、子供たちが一番聞いてみたいこと、伝えてみたいことを考えて、それを指導案に盛り込んでいただければと思います。そして併せて、評価の基準についても考えていただけるとありがたいなと思っています。

例えば、『Let's Try ! 2』にはUnit 5「Do you have a pen?」があります。「お勧めの文房具セットを作ろう」という課なのですが、ここでは最終的に文房具セットを作って友達におくろうという活動です。

練習するときは、例えばお互いの筆箱の中身を見て、Do you have a red pencil? とか Do you have an eraser? とか聞くわけです。でも、これは見てしまえばすぐわかることですし、そもそも筆箱の中からバナナが出てくることもないわけで、全く意外性がありません。本当に子供たちがお互いの筆箱の中を聞いてみたいか？ となります。練習はこれでいいのですが、最終的にはワクワクするような意外な答えが返ってくるとか、お友達が持っているものに対して、それってどういふこと？ と知っている単語や表現を使って返せたら、評価ではAに値します。

例えばこれは、練馬の小学校の例です。

先生は、子供たちがお友達の持っているものを聞きたい時ってどんな時かな？ と考えました。目の前にあるものはすぐに分かるので、家にあるものかなと思いました。「家にどんなものがある？」と事前にアンケートを取りました。すると、ここに挙がっているように、たくさんものが出てきました。例えば、トロフィー、スリッパ、鯉のぼり、メダル、ホワイトボード、猫、ミキサー、メルちゃん、なんていうものもありました。全部を英語にするのは大変なので、先生は「この中から上位15や20に絞って、みんなで英語を練習してみよう」と言いました。まず、みんなで英語を共有することが大事です。一人の人がいっぱい覚えてただけではなく、みんなの知りたい単語ってこんなのがあったね、英語でいうとこんなだよと、みんなで練習をしました。そのあとに、本当に友達に聞いてみたいことをインタビューしました。

ある組がやってみた事例をご紹介します。女の子のペアです。

A: Do you have a kimono? B: Yes, I do.

ここまでできたら、目標表現が達成できているので、B評価です。でも、先生は知っている単語があったら質問していいんだよと言いました。すると、Aちゃんは少し考えてから、

A: What color (is it)? B: It's red.

クラスの友達が「おーっ」と言いました。

A: Oh!

次は、男の子2人の会話です。

A: Do you have a garden? B: Yes, I do.

また、クラスから「おーっ」と、どよめきが湧きました。

練馬とは言っても、今、マンションに住んでいる方も多いので庭があるというみんなビックリしますよね。

すかさずBくん、

A: (Is it) big or small? B: (It's)small. A: Oh!

クラスのみんかも、「おーっ」と、納得したようでした。

さあどうでしょう。これが本当の必然的な場面です。なんだかワクワクしちゃいますよね。例えば、その先、

A: Do you have a comic book?

もちろんこれだけでもいいと思います。でも、もう少し使える表現を使って、A評価を目指そうね、ということです。

A: How many?

これは『Let's Try!』のunit 3で習った表現です。その子は使いました。

すると B: 50 books.

「わー、50冊も持っていたんだー」となります。こうした知っている表現をどんどん入れ込めば、もっと楽しい表現になります。

例えば、How many? は次のことにも発展させることができます。「ALTに漢字集を贈ろう」。『Let's Try!』にも、漢字のストロークを勉強する課がありますが、あれは与えられた漢字のHow many strokes? って聞くだけなんです。

これは、板橋の先生が考えたものを私がアレンジしたものです。自分の好きな絵を入れたり、これはALTに贈るのだからと、筆で漢字を書きました。きれいに書きました。そして、みんなでHow many strokes? と質問し合うんです。一人ずつが書いたものを隠してクラスの子供たちに尋ねます。

SS: How many strokes? S1: Four strokes.

それだけではわかりません。

SS: (Another) hint, please. S1: (It means) "friend".

クラスのみんが「友?」

SS: (Is it) "Tomo(友)".

見せました。上手にかけているお習字でした。

S1: Yes, (it is)

そのほかにも、

S1: Seven strokes. SS: (Another) hint, please.

S1: (It means) "flower". SS: (Is it) "Hana(花)".

S1: Yes, (it is) と、答えていました。

担任が「なんでわかったの?」と聞いたら、〇〇ちゃんは、お花がすごく好きなことを私たちは知っているし、〇〇ちゃんは、友達がたくさんいるから「友」だと思った。と、小学生のことを一番知っているのが、担任の先生です。

藤田先生のお話ではありませんが、英語の発音がどうのとかではなく、一番子供のことを理解している先生方が、子供たちが喜んで取り組めるような場面をたくさん考えて授業に活用していただければと思います。先生方が面白いんじゃないかな？ と思うことは、子供たちもきっと喜ぶと思います。ぜひ、先生たちの叡智を絞って、子供たちがワクワクできるような授業をしていただければと思います。

高野先生：

佐藤先生、ありがとうございました。受講者の皆様に対して励ましの言葉をいただきました。また、講座後のタスクについて解説、誠にありがとうございました。これから佐藤先生のお話について、質問がありましたらメールで受け付けます。ご返答よろしく申し上げます。

続きまして、前回の講座でご出演いただいたJ-SHINE 鈴木菜津美事務局長の方から、全国の受講者の皆様へメッセージをお願いします。

鈴木事務局長：

前回出演させていただきました小学校指導者認定協会の鈴木です。よろしく申し上げます。今回はJ-SHINEとはどのような団体なのかを、先生方に知っていただく機会だと思っています。J-SHINEの正式名称は、小学校英語指導者認定協議会というNPO法人です。趣旨は、「日本の小学校における英語教育の普及と発展の支援」を目的に、2003年の9月に設立された団体です。今回の講座もご協力いただいた藤田保先生、佐藤久美子先生、明海大学の高野先生に理事としてご参画いただいております。

日本の小学校の英語教育を促進するために、地域人材、民間の英語が堪能な人材を指導者として養成して現場にお届けするというのを主なミッションとして活動しています。そのような地域人材の方を育成して、学校現場にお届けすることを通じて、全体的に日本の小学校英語の教育・発展に努めることを掲げて活動している団体です。足立区ではアドバイザーやスーパーバイザーなどの求人協力をさせていただいているので、もしかしたら先生の方でも耳にされたことがあるのではないかと思います。そのような形で、いろいろな教育委員会の方へ、地域人材としての指導ができる民間の方を紹介しているのが私たちの大きな活動になります。

J-SHINEが認定している資格が全部で6種類あります(スライド説明)。左下の方で、黄緑色のものが、準認定資格と言われるものです。こちらは、民間で英語が堪能な方は、学校現場や教育現場で指導した経験がないという方もいます。そういう方でも資格を取って活躍していただくことができるように、黄緑色の準認定資格というものをまず、英語力、指導経験時間を問わずに取得していただけるようにしています。さらに、縦軸は指導経験時間です。資格者の皆さんには、ぜひ、学校現場や公民館、塾など、様々な場所で、たくさんの生徒さんの前に立って授業をしていただくことを慣れ親しんでもらうことを大事にしています。なるべく指導経験を積んで、上を目指していただき、いわゆる、一般の小学校の200時間の授業ができるという証明にしてほしいと思います。指導者の方には、上級指導者資格というものを目指していただくように日頃から声かけをしている状況です。

一方で、表の右側の資格。青色の資格、赤色の資格、ゴールドの資格になりますが、一定程度の英語力がある以上の方に与えられているものです。ここが2018年から新しくできた資格です。先ほど石鍋先生の授業の中でも出てまいりましたCEFR B2ということで、英語力が一定程度あると私どもが確認させていただき、認定した方がもつことができる資格です。英検でいうと準1級の資格になりますが、それ以上の英語力をもっている方が1,500~1,600人ほどいます。もともと、赤と青の資格はなかったので順次、ピンク、水色から皆さんに英語力がある方には切り替えていくということを行っています。私たちも設立から17年経ちました。やはり、英語力を確保することがすごく大事だということを、英語力調査等を拝見して感じています。英語力が一定数ある民間の指導者の方々に学校現場を支えていただければと思っています。

私たちが民間の方々に資格をお出ししているポイントが3つあります(スライド表示)。

1つ目は、小学校英語に対する理解をきちんとしていただくことです。学校の全体像や、小学校英語が置かれている状況に対しても理解していただくことです。

次に、実習時間を一定程度持つていただくことです。

そして、同じく一定程度の英語力を持っていただいて、必要に応じて英語で授業ができるくらいの英語力を地域人材の方々には持つていただきたいと思っています。

先ほど石鍋先生の講義でもありました。ALTの先生と担任の先生がやり取りされていることありますが、あのような場合に、ALTの先生がいなくても地域人材で英語が堪能な方がやり取りを通じて、理解を深める活動ができればと思っています。

私どもの団体は、地域人材に求める能力について、教育委員会に調査をさせていただいたことがありました(スライド表示)。2012年の調査の段階では、約39.7%の自治体が地域人材に英語力を求めています、とあったのですが、2017年の調査ではこの割合が43.8%に増えてきました。様々な変化要因がありますが、やはり地域人材が英語の指導者として学校現場にご一緒させていただく機会が増えてきています。そのような場合に対応できる英語力を地域人材の方々もきちんと英語力を身に付けて現場でご一緒させていただけるよう、資格者を育てていきたいと思っています。

こちらのグラフは、資格を持つている方々で実際に現場の指導に入られている方々に調査したアンケートの結果です(スライド表示)。実際に採用される地域人材の方々のこういった観点が評価されているかがわかります。英語力、子供への英語指導経験と考えている方が、45%ずついました。この結果からも私どもの設定している資格のあり方というものに近づいてきているのかなということを感じます。また、37%の方がJ-SHINEの資格と回答しています。この辺りは、足立区さんにもお世話になっている成果かと思っています。

一方、指導者の方は、指導するにあたって何が重要だと思うかについて聞いたアンケートでは、英語力のスピーキング(73%)や発音(64%)よりも、実際に関わる児童とのコミュニケーション能力(89%)、担任や学校の中の先生たちとのコミュニケーション能力(72%)が大事だと答えた人の方が多いました(スライド表示)。ベースとして、大事なことは英語力があること、指導経験があることには変わりませんが、実際に学校現場に入って指導するには、関わる子供や先生とのコミュニケーションが大事になると感じている資格者が多いことがわかります。外国語活動、外国語科というのは、コミュニケーションの教科になりますので、この辺りの力を指導者の方にも発揮できるようなサポートを私たちはしていきたいと考えています。

最後に、指導者にとって自分が磨くべき能力、経験について聞いたアンケート結果を紹介します(スライド表示)。英語力(スピーキング)英語力(発音)の力を磨き続けることも必要だが、学習指導要領や教科書に則って指導する力、シラバスやレッスンプランの作成力、教材の作成力、ICT活用能力ということが挙げられていました。この辺りは、学校現場に関わっている先生方としては、学校指導要領や教科書、教材が変わる、ICTを活用しなければいけないとなった時に、まだまだ指導者の方も改善していくべき余地があるということがこの調査でわかりました。私自身がこの講座に何回か参加させていただき感じたことは、学校の先生、ALTの先生の中に、英語が堪能で、でも日本で生まれて同じような英語教育を受けていた地域人材の方々が学校現場に入る機会がこれから増えていくのかなと思います。その時に、先生方と地域人材の得意なところをお互いに補いながら、よりよい授業を小学校の教室の中で作っていただきたいと思っています。J-SHINEとしても、先生方の現場作り、間接的にはなりますが、協力できたらと思います。J-SHINEの事務局としてお話しさせていただきました。

高野先生：

本学第2回、第3回から講座を担当した教員からそれぞれメッセージを届けたいと思います。

タイソン・ロード先生：

こんにちは。私たちのワークショップが実用的で便利なものになったらいいと思います。ビデオ、レッスンプラン、事後

教材のタスクをたくさん作りました。ぜひ活用してください。ありがとうございます。

パトリツィア・ハヤシ先生：

こんにちは、タイソン先生が言ったように日本語も難しいです。だから、英語も本当に難しいことが、私たちもわかります。新しいことを学ぶことはそんなに簡単ではありません。本当に山のように高いです。だから皆さん、頑張って、子供たちと「これは私たちの山。一緒に冒険しましょう、一緒にこの山を登っていきましょう」と伝えてほしい。簡単なことではないけど、みんな頑張って、力を入れて成功できると思います。間違いは起きます。一番大事なのは、英語を使って楽しくコミュニケーションをすることです。お互いに新しい言葉を学びましょう。そのことを伝えたかったです。皆さん頑張ってください。

タイソン・ロード先生：

We can do it.

パトリツィア・ハヤシ先生：

Yes, we can.

百瀬先生：

皆さん、今日はどうもありがとうございます。第2回講座で、私たち3人がチーム・ティーチングでお見せしたかったのは、本物のコミュニケーション、人と人とのコミュニケーションを生徒の前で実践して見せることができるチャンスが、チーム・ティーチングの場であるということです。チーム・ティーチングは、必ずしも日本人の学級担任の先生とネイティブの先生という決まりがあるわけではありません。日本人同士、3人でのチームもあると思います。その強みは、先生方のチームの間で友好関係が保たれて一生懸命コミュニケーションを取っている、言語の使い手としての姿を児童に見せることにあります。その姿を見て、「人と話すことって楽しいんだ」とわかると、子供たちも話してみよう、その時に使う言語が英語だったらこうなるのだなというロールモデルを先生方に示していただければと思い教材を作りました。これからどうぞ教材をご覧になって、ご活用ください。ありがとうございました。

前田先生：

第3回講座を聞いてくださり、ありがとうございました。講座後のタスクとして、「講座で研修したSmall Talkを授業で実践しましょう。その成果や課題について他の先生方とお話してみよう」という事後のタスクがありました。どうでしょうか？ その後Small Talkを実践していただきましたでしょうか？ 苦手だと思っている方がたくさんいると思います。それも本当にごく当たり前のことだと思ってくださっていいと思います。第3回で示した「対話の開始」「繰り返し」「確かめ」「一言感想」「質問」「対話の終了」。この6つを使って、少しずつ前に進んでいく感じでやっていただければいいと思います。今日は、繰り返しを使ってみよう、次回は一言感想を言ってみよう、今学期が終わる頃にはさらに一言感想と、質問をやるぞと目標を立てて、少しずつ進んでいければいいと思っています。

ご質問もいただき、ありがとうございました。全てではありませんが、ホームページの方で回答しましたので、ご確認ください。その中で答えられなかったものを1つ、本日はご紹介します。「クラスの中での児童の英語力の差」という問題です。これはSmall Talkでなくても、いろいろな回で思っている先生がいらっしゃると思います。これはおそらく英語だけではなく、他の科目でも同じような問題があると思います。英語に関しては、ご家庭で英語の塾に行ったり、DVDを見たり、英語に触れている多さ・少なさという差はあると思います。どうしても英語についていけないというお子さんもいると思います。それを授業でどうするかというのは、ペアワークになった時に、そのようなお子さんのそばについて助言をするとか、授業外でどんなところが難しいのかな？ と聞いてみるとか。他の教科の授業でしていることをすればいいと思います。英語ができるお子さんに対して、先ほど藤田先生もおっしゃっていたように、グループワークの中でリーダーをやってもらおうとかして、外でも中でも褒めて伸ばしてあげることがいいと思います。

最後に、授業実践として難しいことも多いと思います。でも、英語はコミュニケーションの道具です。道具を1つ手に入れた方がいいよね、くらいの気持ちでやってほしいと思います。気負わずにいてください。道具といえば、ドラえも

んの「ほんやくコンニャク」があります。それに近いものはあるかもしれませんが、やっぱりコミュニケーションは生の声で、顔の表情が伴って行うことが基本だと思います。ぜひ、先生たちも楽しんでください。わからないことがあれば、いつでもご質問ください。ありがとうございました。

高野先生：

時間の関係で質問については、毎回、事後タスクとして先生方に協力していただいているように、リフレクションシートを活用してお送りください。それらについてはきちんと回答させていただきます。

私からは、これまで実施してきたMEIKAI-JOE全5回の講座が終了しましたので、ご挨拶をさせていただきます。振り返ってみると、本学が、文部科学省の公募である教員養成系大学との連携により小学校外国語教育の専門人材育成、確保事業に応募して、文科省から委託を受けたのが本年の8月でした。この間、事業計画を立てる上で、本学と協定を結んでいます、自治体の東京都足立区、千葉県浦安教育委員会、秋田県横手市を講座提供連携教育委員会とさせていただくとともに、小学校英語について20年以上の活動をしてきたJ-SHINEを協力機関とさせていただきました。コロナ禍にあつて、国の求めに応じて、事業そのものを遠隔とすべき方向が示されました。そうした技術的な面に卓越された業績のある株式会社モアカラーに参入していただき、この講座を運営していただきました。このようにして、明海大学と教育委員会、J-SHINEが一体となって皆様方に講座を提供できる環境ができたわけです。

明海大学のMEIKAI、J-SHINEの「J」そして教育委員会のOffice of Education「OE」の頭文字をとって、「MEIKAI-JOE」とした取り組みが、モアカラーによる撮影動画配信によりスタートしました。本事業で実施しました外国語授業の動画・講座は、小学校の先生方の多くが抱えている外国語活動、外国語科の授業の不安感を払拭して、授業に積極的に取り組む意欲を向上させ、また、円滑に指導する指導力を養成する目的とし、3つの教育委員会を4拠点を中心に約200人の先生方に対して実施してきました。私たち明海大学の教員とJ-SHINEの藤田先生、佐藤先生、鈴木事務局長は、毎回の講座内容が、小学校の先生方にとって役に立つ内容になるように心がけてきました。いかがでしたでしょうか？先生方から毎回リフレクションシートや評価アンケートについてお願いしてきました。今回の講座についてもリフレクションシートや評価アンケートのご提出をお願いします。併せてのお願いですが、全講座の総合アンケートについても、教育委員会を通じてすでに送付されています。こちらのご回答もお願いいたします。先生方からの回答をまとめて、来年度末までには報告書として文部科学省や各先生方のお手元にお届けいたします。

最後となりますが、東京都足立区、千葉県浦安教育委員会、秋田県横手市の教育委員会の皆様、J-SHINE、モアカラーに感謝いたします。ここまでお付き合いいただきました、ご参加いただいた先生方の益々のご発展を祈って、最後の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。